新しいコレクション

尾藤 豊《シベリア紀行》

尾藤豊（1950-1998）
《シベリア紀行》

1958年
油彩・キャンバス
162.1×130.3cm
平成24年度寄贈

広大な緑の大地のほぼ中央に、赤と白に塗り分けられた建造物が描かれています。そこに直交する上下左右の軸が画面を四分割し、大地の中に忽然と現れる都市の秩序を表しています。一見してわかるように、実際の風景を再現描写した絵画ではありません。尾藤豊は、東京美術学校で建築を学んだという異色の経歴をもつ作家ですが、都市が有するダイナミズムを、複数の視点を織り込んだ展開図のようなイメージとして表現しようとしています。

赤い城壁の間から画面の中央を縦に延びていく鉄塔のようなかたちに着目すると、それは屹立する塔を真横から描いているようにも見えますし、また大地に刻まれた道を上空から捉えたようにも見えます。先端へと向かって収斂していく塔の形状は、遠近法によって描かれた道のそれと重なり、塔であれば垂直の高さを、道であれば大地の深い奥行きを観る者に想像させます。このような両義的な塔＝道の先には、地平線に浮かぶ黒い太陽が連なります。

画面の上部にわずかに顔をのぞかせた地平線を頼りにすると、この作品は、はるか上空から俯瞰的に地上を眺めたものだということがわかります。この地平線が確固たる上下の軸を画面に与えているのに比べて、中央の建造物は複雑に切り刻まれ、多視点で再構成されています。赤い城壁にうがたれた開口部に注目すれば、その位置が回転していることに気づくでしょう。まるでその視点の転換を予告するように、緑の大地にふたつの矢印が描きこまれています。

建造物の赤と白の色彩の対比を解き明かすには、尾藤が一九五七年に「世界青年学生平和友好祭」参加のために旧ソ連の首都モスクワを訪問し、その体験をもとに本作品が制作されたという事実に触れなければなりません。発表時の題名は《建築場》、《シベリア紀行》は後年の改称です。おそらく赤レンガの古い城壁はモスクワのクレムリン宮殿を指しています。そこにモザイク状に絡み合う白い部分は、鉄道の信号や巨大なクレーンが示唆する鉄とコンクリートによる近代的な構築物を表しているのでしょう。初出時の題名は新旧が交錯する歴史的都市モスクワの力動に焦点をあてたもの。しかし、背景をなすのは、シベリア鉄道の車窓から眺めたと想像されるシベリアの雄大な自然。両者への感銘が、この作品に縫合されているのです。

地上の世界を鳥瞰する視点で、都市とそこに生きる人間の状況を把握し、それを箱庭のような複雑な空間の構造に置き換える尾藤独自のスタイルがここに完成しました。

（美術課主任研究員　鈴木勝雄）